

愛鷹南麓及び浮島ヶ原低地の 地形と土地利用

目 本 美 地 子

*論文内容 (目次)

はじめに

I 調査地域概説

§1 調査地域

§2 調査地域の環境

II 地 形

§1 地形分類

§2 各地形面について

§3 浮島ヶ原の生成、変遷

III 土 地 利 用

§1 地形面との関係

§2 土地利用の現況

§3 浮島ヶ原の開発と土地利用の変遷

お す び

*テーマとフィールド

静岡県 の 東 部、東 海 道 線 吉 原 駅 から 沼 津 駅 に か け て の 敷 河 湾 沿 い に、浮 島 ヶ 原 と 呼 ば れ る 低 湿 地 が あ る。こ の 浮 島 ヶ 原 か ら そ の 北 側 の 愛 鷹 山 南 麓 斜 面 に 重 なる 地 域 を 私 は 卒 業 論 文 の フ ィ ー ル ド と し て 送 ん だ。こ こ は 東 海 の 要 所 に 位 置 し、交 通 条 件、気 候 条 件 に 恵 ま れ な が ら、長 ら く 開 発 が お く れ た 地 域 で あ る。浮 島 ヶ 原 は かつて は そ の 名 の 如 く、洪水 時 に 「浮 き 流 れ」 と 言 っ て 敬 呼 へ 敬 十 呼 の 田 が 稻 株 と 共 に 浮 き 上 っ て 水 流 に 従 っ て 移 動 す る と い う 現象 が お こ り、文字 と お り 浮 き 島 で あ っ た。昭 和 10年 の 昭 和 放 水 路 竣 工 後 は こ の 浮 き 流 れ 現象 は 殆 ど なく な り、従 来 の 3年 / 作、5年 / 作 と い う 収 穫 状態 も 脱 し て、湿地 の 大 部 分 は 水 田 化 さ れ、今 日 わ ず か の 原 野 を 残 す の みに 至 っ た。し か し、低 湿 地 の 持 っ 色 々 の 問題 は 依然 と し て こ の 地 域 に 大 き な 影響 を 与 え て い る。こ の 様 な 地 域 を、地形 と、そ の 上 の 人 間 生 活 を 支 え て い る 土 地 利 用 と を 中 心 に、そ の 性格 を と ら え て み た い。

* 地形と土地利用

調査地域は、地形的に、愛鷹火山山麓、駿河湾沿いの砂洲及びこの両者に挟まれた浮島ヶ原低湿地の3つの部分から成る。即ち、富士川の運搬した砂礫によって沼津十本浜に至るまで約20kmに亘る沿岸洲が形成され、これによって愛鷹山麓との間に生じた浮洲は、その後の埋積によって干潟となった。これが浮島ヶ原で、ヨシ、マコモなどの沼沢植生の自生する沼地が浮洲の名残をとどめている。こうした成り立ちからわかる様に、浮島ヶ原は排水極めて不良の泥炭質低湿地で、海拔25m以下の部分が全体の2/3の面積を占めている。

さて、地形の特色を明らかにする為に、2万5千分の1地形図を基図とし4万分の1空中写真の判読及び現地調査によって調査地域の地形分類を行い地形分類図を作成した。分類した地形図は、愛鷹火山裾野緩斜面、同急斜面間折谷内上位段丘面、同低位段丘面、浮島ヶ原泥炭質湿地、同北縁部質低地同東縁部低地、浜堤、浜堤のバック・スロープ、そして浜堤西縁部の1/1面であるが、この地形分類調査のまとのの意味で、浮島ヶ原の生成と発達についての考察を試みた。

ところで地形と土地利用とが密接な関係を持つのは当然であるが、本地区に於ては両者が極めてはつきりした相互関係を持っている。このことは各地形面と土地利用を対応させることにより明らかにされる。言い換えれば、土地利用は地形の微妙な差異をもよく物語っていると云える。1例をあげると調査地域の水田はその92%以上が一毛作田である。これは言うまでもなく水田地帯たる浮島ヶ原が排水不良の低湿地の為であるが、比較的海拔高度が高く、土壌断面も泥炭質地とは幾分異なり、排水の稍良好な北縁部砂質低地及び浜堤西縁部に限って二毛作田が分布している。さて、調査地域に於て見逃すことの出来ないのは駿河湾臨海工業地帯化の問題であるが、ここでも浮島ヶ原の持つ性格が大きな問題を投げかけている。例えば砂質土壌と温暖日長、交通条件等に恵まれた砂洲地帯は、蔬菜の促成、早期栽培、花卉栽培が発達し、又モモ、ストウ等の果樹園としても広く利用され、都市近郊農業の性格が強い。それが、近年農地の工場、住宅地への転換が進んでいるが、これらの敷地も現在の段階では限られている。この工場地帯化の問題と、本論文のしめくりを兼ねて、浮島ヶ原の閉塞に伴う土地利用の変遷について最後にまとめてみたのであるが、浮島ヶ原というものが、過去、現在、そして将来を通じてこの地域に対して持つ意味は、極めて大きく、かつ特異なものであると思う。

*お わ り に

甚だ未熟なりポートではあるが、ともかくも自分でフィールドを歩き、つかんできたものを何か一つの形に表わしてみることには大変貴重な経験であったと、この何か月かをふりかえって強く感じたことであつた。

郡山盆地、特に郡山市の地誌

鎌形 美奈子

私の卒業論文の題名を郡山盆地の地誌と決める途にはいる人な理由があつた。先ず最初には日本の二大流水の一つとされている安積流水について、地形との関係、土地利用への働きかけなど考察する訳だったが、これはその灌漑地域が広大な範囲にあり、現地調査にも不便な点など、又扱う問題が大きすぎる事等から取りやめた。次いで今年度の論文の課題である地形と土地利用に就て重点的にみていこうとしたが、特に地形、地質について資料が乏しく自分の現地調査だけでは不十分な事、又郡山という地域は農業開発の歴史、工業都市としての機能などに考える事は適当なことではないと思ひ、単に地形と土地利用の関係だけを追求すると、この地域の特色が明確に把握出来ず片手落ちの傾向になるのではないかと思つた。かかる過程に至て一地域を総合的に観察し、各分野に於て四年間の総復習的な態度をとりたひと思つた。

先ず、大きく自然環境と人文環境に分け、前者では気候と地形に大きく重点を置いた。

気候では先ず福島県全体に於けるその地理的位置を確認した後に、この盆地気候を表日本型の矢通り、裏日本型の会津地方、兩者の中間型を示す中通り地方と比較しながら、その特徴を握みたいと思つた。又気候が土地利用に及ぼす影響もつけ加えたが、これは気候に限らず、各項目間の相互の関係を常に念頭においたつもりである。

次に地形では航空写真による地形分類図の作成、各地形面の表面記載など一通り実習的な作業として行つた。この章で特に注目した事は、数少ない郡山盆地の地形の研究で、盆地地形の中核を占める大槻町一帯を中心とする一大平野を地名をとり大槻扇状地として扱っている事に対して扇状地の扇尖部に於てさえ、礫層がみられない事、地下水の湧出している事など扇尖部と見做し難い事から、実際の扇状地はもつと規模が小さく、扇状地の末端はテルダ的な地形に新移していると思つたことである。溜池地域である事も、